



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ語圏活字メディアの歴史について：新聞を中心に
Author(s)	江口，豊
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル，17，3-12
Issue Date	2013-10-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53603
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	departmental bulletin paper
File Information	JIMCT_1701_eguchi.pdf



《研究ノート》

ドイツ語圏活字メディア の歴史について —新聞を中心に—

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 教授

江口 豊

abstract

The History of the Newspaper:
its origin and expansion throughout Germany and Switzerland

EGUCHI Yutaka

The year 1609 marks the emergence of the newspaper in Europe with the publication of *Relation* in Strasbourg and *Aviso* in Wolfenbüttel. The expansion of the periodical information paper brought enormous ideological change to the European society in the age of the Enlightenment, laying the foundation for the social and political upheavals of the modern era.

In Switzerland with Zurich as its cultural centre, newspapers began to be published 1621 at first on a weekly basis, and then became daily publications. This dramatically affected the flow of information within society, and made ideas and facts more permanent and easily accessible in the public domain in Switzerland. In Zurich, one of the representative newspapers was the *Neue Zürcher Zeitung*, which was founded in 1780 and continues to be in circulation until this day. This newspaper is one of only about 40 papers in the world today to still be in circulation after a tradition of more than 200 years of publication and is counted as a quality paper for intellectuals in spite of its small circulation numbers.

In this paper, focus will be placed on discussing the history of Swiss and German newspapers as, to date, little research has been conducted on the historical development of these newspapers, especially in comparison to their English counterparts. Such a discussion is vital to better understand the impact of such media on society in Europe and could lead to the possibility of future comparative research on the influence of different information flows in media history in European countries.

0 序¹

活版印刷による新聞がドイツ語圏で発生して、ヨーロッパ中に広がり、最終的には世界中に共有されるものとなった。デジタル化が進行した現在でも新聞・雑誌はマスメディアの不可欠な構成要素を成している。そもそも新聞はどのように発生し、発展したのかについて、本邦ではイギリスでの事情を除くと極めて情報が限定されている。17世紀初頭に起こったこの歴史的な出来事が、その後の思想史、言語史にも大きな影響を及ぼし、ひいては社会全体を激変させる原動力となったといっても過言ではなかろう。

本研究では、ドイツ語圏の新聞史の一部について、そのマスメディア史上の重要性を踏まえて、先行研究を紹介しながら発展の概略を辿ってみることとする。とくに、ドイツ語圏でも早くから新聞が普及したスイスでの展開と、そのなかでも200年以上にわたり存続している新聞にとくに注目して紹介することとする。

▶1 本研究は、科学研究費補助金「活字メディアにおける専門言語の歴史的普及の基礎研究」（課題番号23652080）の支援を受けて実施されている研究成果の一部である。

1 新聞というメディア

そもそも新聞という活字メディアは、公共コミュニケーションの自明な構成要素・構成手段として定着している。Bentele/Brosius/Jarren²は、「週に複数回刊行される紙面で構成された活字メディアであり、原則的に無限定の広がりをもつあらゆるテーマから最新の出来事をその報道のなかで選択し、編集上の加工を施し、無限定のオーディエンスに流布される」という定義を与えている。続けて指摘されている四つの特性「定期性、即時性、非限定性、公共性」は、しばしば引用される³ものである。Kunczik/Zipfel⁴は検討の幅を「公共的なマスコミュニケーション行為」に拡張することで九つの特徴を挙げている。前出の四つの特性と重複する「定期性」と「公共性」以外の「即時性」と内容上の「非限定性」と併せれば、現代の新聞の特性としてもこの11の特徴がもっとも十全なものと考えられよう。

▶2 Bentele/Brosius/Jarren (2006), S.322.

▶3 例えば、Gebhardt (1999), S.881. 参照。

▶4 Kunczik/Zipfel (2005), S.50.

1) 圧倒的に短期的な消費（利用）に向けられた内容：

刊行形態が何であれ（日刊、週刊などを問わず）、利用（講読）される期間は短い

2) 高度な技術を使用する組織形態で作成される：

新聞社などの企業や組織の形態で制作される

3) いろいろな技術の助けを借りる：

取材、印刷、販売などの過程で通信、印刷、輸送に関わる技術を利用す

る

- 4) 発信者（コミュニケーター）は、匿名のままの多数の人間（分散したオーディエンス）を同時に相手にしている：
発信者・記者と読者（その数量は歴史的に大きく変貌するものの）の関係に当てはまる
- 5) 公共的な性格をもつ（アクセスに限定なし）：
無料の場合は勿論、有料であっても代金を支払うことで誰でも講読可能である
- 6) 一方方向性（コミュニケーターとオーディエンスとは非対称関係）：
いわゆる「読者欄」などを除けば、コミュニケーションの流れは一方のみである
- 7) 間接的である（対人コミュニケーションのように直接的ではない）：
新聞という紙に印刷された情報手段を利用するため、間接的である
- 8) 制作についてはある種の定期性：
日刊であれば毎日、週刊であれば一週間に一度という決まった時間間隔で刊行される
- 9) 継続的に提供される：
経営状態が悪化するなどしないかぎり、刊行期間が限定されていない

もちろん、こうした現代の新聞定義に適合する情報媒体は、発生と同時に完成したわけではない。歴史的に先行形態となるもの（ドイツ語圏のメディア史で扱われる *Neue Zeitung* のようなものやビラ・パンフレットなど）がいくつか存在したことが知られているのと同時に、新聞自体も歴史的な発展の中で上記の11の特性を満たすものになっていったことは容易に想像できる。そうした新聞の歴史を、とくにドイツ語圏の先行研究に依拠しつつ、以下に確認しておきたい。

2 新聞の発生と歴史的展開

2.1 ドイツ語圏における新聞の史的展開

現代の新聞形態が一朝一夕に成立したわけではなく、それに先行する歴史的事象も指摘されている点はずでに触れた。以下に、Straßner (1997)、Straßner (1999)、Koszyk (1999)、Maissen (2005)、Welke/Wilke (2008) などの先行研究から、17世紀以降のドイツ語圏における新聞の発生・展開について、注視すべき点をいくつか取り上げていく。

まず新聞が成立するにあたり、活版印刷術の発明と印刷所の拡大、通信を伝えるための交通網の整備、ニュース記事を執筆する主体（記者・編集者の前身）が前提条件となったことは、Koszyk (1999, 896f.) にも明確に指摘されている通りである。本来、識字率が極めて限定された時代の情報のやりと

りは、限られた集団の間で秘密裏に行われることが多かった。現代においてもなお外交の舞台などでは暗号も駆使して、秘密での情報のやりとりが維持されている。また、公益や国益追求とは別次元の個人・組織の利益追求の場面で情報のやりとりの典型として、Straßnerは経済活動に伴う情報交換を挙げている。商人が「国内外とコンタクトを維持し、外国語の知識もあり、組織立ってものごとを進める才能を持ち合わせていて、最良で、しかももっとも広範な情報を持った集団」であり、したがって「商人の報告が専門的で信頼できるものだから」(Straßner 1999, 913)である。商人以外にも、貴族などの統治者、外交官、軍人、学者、聖職者ももともと秘密の情報交信を行っていたが、やがて彼らも商人がもっていた通信員網（例えばアウクスブルクのフッガー家のそれ）とその情報を利用するようになる。Straßnerによれば、「1571年に最初の通信員事務所がアウクスブルクに設けられ、1615年には七カ所に増え」、「本来の経済情報以外に添えられていたニュースが」「20回から25回⁵写し書きされ、定期購読者に配布された」(Straßner 1999, 913)とされている。「印刷所については、1570年のシュパイアでの帝国議会の決定により王侯の居住都市、大学所在の都市や神聖ローマ帝国の直属都市にのみ活動は許された」(Koszyk 1999, 897)ことも、新聞発行に更なる制限を加えている。このように、交通、印刷、商業という三要件を満たすのは、一定規模以上の都市であった。その意味で新聞は当然都市現象であるが、普及の過程で周辺の地方にも当然浸透していくことになる。

Langは、一次資料の調査研究に基づいて、新聞の前身が「非定期的ながら1480年頃にドイツ語圏で発生し、17世紀末迄にはヨーロッパ中に広まった」Neue Zeitung（（新しい知らせ））だとしている。現代では「新聞」に相当するドイツ語の単語Zeitungがここでは「知らせ、ニュース」を意味し、Neue Zeitung（（新しい知らせ））として「最近起こったことを散文、歌、格言詩などのかたちで伝え、イラストも多かった」(Lang 2008, 117) ビラ・パンフレットのようなもの（手書きのものも含め）であり、17世紀まで残っていたようである。

上記の新聞の持つべき特徴のなかでもっとも重要な四つの指標「即時性＝速報性」、「内容上の無限定」、「定期性」、「アクセスの無制限」のうち、「定期性」が促された背景として、Koszyk (1999, 897) は、16世紀から17世紀当時の、重要かつ継続的な性格を持った社会的事件としてオスマントルコ軍によるウィーン包囲、宗教改革後の新旧教紛争、三十年戦争を挙げている。そうした点を踏まえて、Straßnerを含め複数の専門家が、1587年以降にニュルンベルク、ウィーン、ストラスブール、プラハなどで、月刊形態のニュース集の存在を伺わせる事実を指摘している (Straßner 1999, 1)。なかでも、スイスのロルシャッハという町からAnnus Christi 1597のタイトルを付されたものが現存していることもよく知られている。しかしながら、Böningは、手書きのNeue Zeitung以来の郵便制度によるニュースの到着・収集および編集という事情が作業サイクルを構成する上で決定的だったと指摘している (Böning 2008, 290)。

こうした流れを受けて、Neue Zeitungの定期性はさらに高められ、情報提

▶5 15から20という数字を挙げる研究者もいる。

▶6 Relationは「報告」、Avisoは「手紙、報告」の意。

▶7 Welke/Wilke (2008) はこれに基づいて2005年を新聞400年周年としている。

供の間隔を狭めていく。1605年には、現存するものは確認されないものの、ストラスブールでJohann Carolusが新聞発行の許可申請を行った記録が残されている。さらに1609年の時点で二種類の週刊新聞がそのストラスブール (*Relation*紙) とヴォルフエンビュッテル (*Aviso*紙) の二都市で実際に発行されていたことは確認されている。両紙の実物は1609年刊行分が保存されているが、ストラスブールに関しては先行する定期刊行物 (おそらく1605年に発行許可申請がされたもの) の継続である可能性が高いことをStraßner (1999) などは述べている。いずれにせよ、両紙はヨーロッパにおける新聞の出発点とされる。⁷⁾以後、「オランダ (1618年から1620年)、フランス (1620年)、イギリス (1620年から1622年)、スウェーデン (1624年)、イタリア (1643年)」とヨーロッパ各国に続々と週間新聞が広まった。当時の新聞の普及に関して、Straßnerは、平均すると350部から400部程度が印刷・配布部数であったこと、(*Hamburger Wöchentliche Zeitung*が記録している1500部などという数字は例外的)、郵便での配達、独自の配達員の配達、売店・印刷所での手渡し・販売の手段があったことを述べている (Straßner 1997、62)。その後、新聞は一週間に一回から複数回へと刊行のペースを上げていき、1650年ドイツの都市ライプツィヒの*Einkommende Zeitungen*で日刊紙の登場を迎えることは、Koszyk (1999、897) にも記述されている通りである。

17世紀の段階ですでに読者層も「エリート層たる宮廷関係者、高級官吏、軍人、聖職者、学者」から「市民層たる医師、技術者、詩人、商人、兵士、船員など」に拡大したという。とはいえ、「新聞の年間購読は比較的高価であり、職人の一週間分の賃金に相当する」もので、「講読サークルが結成されて、二桁の構成員が共同で講読し分担する」形がとられていたことも報告されている (Straßner 1997、63)。「17世紀後半には (北ドイツの) ハンブルクやアルトナでは、名望のある、大学出で資質の高い人物が新聞事業で活動」し始めている。「情報に富んだ興味深い新聞を製作するためには、当然のことながら完璧に読み書きができるだけでなく、外国の通信や新聞を加工処理できるだけの外国語の知識をもたねばならなかった」と指摘する研究者もいる (Böning 2008、292)。

17世紀に登場した新聞は、続く18世紀以降、量的な拡大・膨張にともない、報道の質にも大きな変化を呈していった。Straßnerは、量的拡大の例として、「18世紀後半で一週間にのべ30万部の新聞が読まれたが³⁾、「聖書と公教要理を除けばもっとも読まれた」ことを指摘している (Straßner 1999、915f.)。まさにこうした状況こそが、「新聞が、啓蒙主義の時代を準備した17世紀のもっとも重要な媒体の一つと見なすことができる」という指摘の背景である (Böning 2008、294)。というのも「新聞が、学者以外にも」(ラテン語ではなく⁸⁾「それぞれの母語で非宗教的刊行物の読者層を生みだし、更なる定期的、非定期的刊行物のジャンルが発生する原因」(Böning 2008、294) となることで情報の質的・量的拡大のきっかけになるだけでなく、「新聞が世界に関する知識と世界の認識に役立つ専門的情報を時間経過の中で」(Böning 2008、295) 定期的・継続的に伝えることにより、「国務や軍事を司るメカニズム」、すなわち「ヨーロッパに関係する諸事件の関連を理解させる」(Böning 2008、

▶8 シルト (1999 ; 126) によれば、1681年の時点で印刷物に占めるラテン語の比率をドイツ語が初めて上回るが、新聞の存在とその利用・消費がこうしたリンガフランカとしてのラテン語の地位を弱める方向に働いたのは間違いないであろう。

295) という読者層の根本的変質を促したからである。1637年には「普通の人間が新聞により統治者を批判することを覚えたのだ」(Böning 2008、297)という記述さえ確認されている。

こうした新聞の社会思想的影響に関する議論以外にも、新聞が書記言語を使用するメディアであることで、社会全体の言語使用そのものへ影響を与えたことも触れずにはおけない。まず、新聞が17世紀以降に登場したことで、限定付きながら言語の歴史、本論の場合はドイツ語の歴史と関連づけ、言語現象の実例として位置づけられることがある。例えば、ドイツ語史研究の大家Hans Eggersは四巻本のドイツ語史の中で活字メディアによる言語使用がもつ社会言語学上の意義を指摘している。⁹

「活字メディアにより、200年間かけて古典文学の頂点に達した書き言葉があらゆる家庭に届けられたのである、それはおそらく書き言葉の民主化と言ってもよい出来事であろう。」

「ますます多くの集団が、程度の差はあっても方言を押しつけて、書き言葉として成熟した言葉を口に発し始めた。」

すなわち新聞の読者層の拡大が、社会的言語コードの使用拡大もしくは普及をもたらしたという主張である。Eggersは同書で新聞のドイツ語と高尚文学のドイツ語との未分化段階も認めて、「文学と活字メディアは一体のものと扱うことができた。というのもエッセーのようなかたちで作家もその作品を新聞、雑誌に公刊したからである。」とも述べている。しかし、この未分化状況はまもなく解消され、早くも19世紀当時には、活字メディアのドイツ語への否定的見解・批判が吹き出す。ショーペンハウアーの記述を踏まえたEggersの記述は中立的である。

「日々書くことへの強制が、素早い仕事、日常の決まり仕事、言語上の決まった型に誘惑していった。」

「ショーペンハウアーは新聞ドイツ語という用語で、とくに短縮された表現に流れる傾向について活字メディアを貶した。」

Straßner (1999、915f.) は、ヨーロッパの新聞の報道傾向の変遷を次の9段階で説明しようと試みている。(1) 私的な事実報道、(2) 公的な、しかし非継続的事実報道、(3) 公的で継続的事実報道、(4) 操作された事実報道、(5) 背景指向の報道の萌芽、(6) 解説的報道の嚆矢、(7) 国家に規制された報道、(8) 中立的報道、(9) 立場を明確にした報道である。このうちの中立的報道の代表として、Times紙と並んで、後段で紹介する*Neue Zürcher Zeitung*が挙げられている。それは、「出来事・事案について、可能なかぎり多くの視点を示し、利害関係者からは距離を置く」姿勢と説明されている。

19世紀に入ると、新聞は電信などの更なる通信手段の革新により速報性を高め、印刷技術の改善により、部数の爆発的増加、写真などの取込が可能となり、「19世紀初頭で300万人から400万人のドイツ語圏の男性が新聞講読(成人男性の三分の一に相当)を、都市部の食堂、カフェなど、郡部では居酒屋や番兵詰め所」などで講読と議論する状況が生まれ、文字通りのマスメディア(大衆メディア)が成立したといえる」(Straßner 1997、63)。

►9 Eggers (1985): Deutsche Sprachgeschichte. Bd 4, S.128f.

2.2. スイス国内での新聞の史的展開

前節で紹介したように、ドイツ語圏に端を発した新聞の成立とその拡散は、当然ながらドイツ語という紐帯で結ばれた隣国スイスにも及ぶこととなる。Maissen (2005, 17) によれば、17世紀のスイスでも類似の状況が表れている。「1621年から1681年にかけて、チューリヒで『Ordinari-Wochenzeitung』という週刊新聞が毎週水曜日に発行された」ほか、『Montags-Zeitung (月曜新聞)』『Freitags-Zeitung (金曜新聞)』などが続いた。ドイツ語圏につづき、フランス語圏のヌーシャテルやローザンヌでも新聞が発行され始めた。こうした新聞の量的拡大は、Maissen (2005, 17) に言わせると、「18世紀末までに読者数を十倍に増加」させ、「新聞・雑誌が教養市民層のコミュニケーションフォーラム・批評フォーラムとなった」のである。

スイスに於ける新聞の発生・拡大について、ヨーロッパ全体で提起された説明以外に特殊なものが指摘されることはない。Maissen (2005, 11ff.) でも、次節で述べる『Neue Zürcher Zeitung』紙との関連ながら、中世以来の知識・情報の寡占・独占状態の崩壊とそれに伴う政治・経済・文化情報の部分的平準化・拡散が新聞の成立と発展を醸成したという見方をとっている。Maissen (2005, 12f.) はさらに、例えば18世紀の「南米での銀産出がインフレを呼んだり、スイスの自治体や個人がすでに投資していた海外植民経営の会社の好況・破産のような、遠隔の地での展開がますます自分の身に及ぶようになる」といったようなかたちで一般市民にとっての世界の拡大がおり、身近な世界から地球全体への視野拡大の流れという点をやはり強調している。

とりわけチューリヒという都市の特殊性として、南北ヨーロッパ交通の要衝という地の利と、ツヴィングリ以来の改革派教会の影響が挙げられる。交通の要衝とはすなわち通信の集散地にもあたることになり、改革派であることは権威的な旧教会への反発から、「信仰者個人がSola scriptura (書かれたもの=聖書によってのみ) 自らの正義の神を見いだす」とMaissen (2005, 12) にあるように、自己の知識・学習に基づいて世界を了解しようと努力することが求められることを意味している。広義の改革派教会の影響としてdie Helvetische Gesellschaft (ヘルベティア協会) に代表される18世紀の各種啓蒙主義団体・組織の存在も強調されている。それらは大学が存在しなかった当時(チューリヒに大学が設置されたのは1833年)、ありとあらゆる学術思想の議論の場となったのである。スイス全体で120ほど存在したこの種の団体(Sozi-
etät) の約25%がチューリヒに集中していた。こうしたこともあいまって、18世紀当時の雑誌がスイス全体で100種あったとされるが、その半分までがチューリヒで発行されていたほどである。

2.3 *Neue Zürcher Zeitung*という新聞

*Neue Zürcher Zeitung*は、1780年*Zürcher Zeitung*の名で創刊されたスイスチューリヒを本拠にした新聞である。*Neue Zürcher Zeitung*の名が冠されたのは1821年以降のことである。世界中で18世紀以来継続して存続している約40紙のひとつである。今日ではスイス国内で紛れもなく高級紙(インテリ向

けのクオリティーペーパー)の一つであり、スイスでは最古のドイツ語新聞の一つでもある。公称販売部数約16万部という規模からすれば実に小さな存在であるが、国際的にも評価の高い新聞である。

Maissen (2005, 19) は、この新聞について次のように解説している。上述の*Neue Zürcher Zeitung*の第一号は、ヘルベティア協会の創立者の一人Salomon Gessnerが³1780年1月に発刊した。Salomon Gessnerの父Davidも印刷業者かつ書籍商であり、*Montag-Zeitung*の創立者で、後に印刷所を引き継いだ息子のSalomonが編集していた。Salomon Gessnerは、義父との関係でチューリヒ最古の印刷所に関係している」が、因みにこれは今日チューリヒ市内最大の書籍店網Orell&Füssliにたどりつくという家系である。「当初は、週二回の刊行(水曜日と土曜日)で」あり、「最良のフランス、英国、イタリア、オランダ、ドイツの新聞、そして独自の通信員を通じて、可能な限りスピーディなニュース報道を心がける」と謳った。Burger (2005, 37) によると、当時すでに通信員の総数が61名だったことも判明している。Maissen (2005, 20) は、さらに、創刊時の年間購読費が1 Gulden 30 Kreuzer (1Gulden=60 Kreuzer) だったこと、1月始めに創刊予定だったが、既存の『*Zürcher Zeitung*』との紛争のため、1月12日になってようやく創刊したことにも触れている。また、Salomon Gessnerの後任の編集者四代はすべてドイツ人であり、そのうちの一人Johann Kaspar Risbeckを推薦したのはGoetheであった逸話も紹介している。「チューリヒがドイツ人啓蒙主義者に魅力的に見えた」理由の一つとして、「4人とも聖職者の経歴を経ていて、チューリヒの検閲がカトリックに敵対していたこと」をMaissen (2005, 20) は挙げている。また報道内容についても、「外国報道(戦争や君主・宮廷、経済情報、収穫報告、為替相場、穀物価格など)が中心であった」が、逆にこうした内容が商人から「有害なニュース」だとして批判され、対象から外されることもあった。これは、その後のこの新聞の紙面内容(経済情報に強い*Handelsblatt*という副題をもつ新聞でもある)を考えると誠に意外であろう。それ以外には、「尋常ならざる事故、犯罪、化け物、自然災害(時にはスイスからであっても)が報道されが、原則的に「チューリヒを含むスイス関連の政治情報」は許されてはいなかった、もしくは「慎重に扱うべき」とされていた。¹⁰

3 今後の展望

新聞の成立に関する研究は、ヨーロッパ各国にそれぞれ膨大な量の蓄積がある。オランダを例にとると、1618年のアムステルダムでの刊行物が現状で確認できる最古のものではあるが、新資料次第では若干遡ることも考えられるという(Koopman 2008, 124f.)ほど、新聞の歴史の厚みでドイツ語圏にひけを取らない。やはり、ドイツ語圏同様、「年刊」のかたちでスタートしたと推測できるフランスでの新聞成立事情も、その後の量的な急拡大という点

▶10 *Neue Zürcher Zeitung*創刊と同じ年に、Johann Heinrich Waser事件が起こるが、これはそうした背景抜きには考えられない。それにしても、チューリヒの戦争資金(現代風に言えば国防予算)について外国であるドイツの雑誌に該当する資料を掲載したために大逆罪の咎で斬首された事件は国際的にも衝撃を与えた。

▶11 梶谷 (1991)、芝田 (2000) 参照。

も含め、大変に興味深い。もちろんライブツィヒから遅れること50年余、ロンドンで日刊新聞が開始されたイギリスの新聞事情については日本にもいくらか紹介されている¹¹。

定期性という新聞の条件の一つを満たしていないとされるNeue Zeitungについても、その全体像を確認する必要がある。公式の新聞成立時期（1600年から1610年の10年間）にも230ものNeue Zeitungが確認されている（Lang 2008、119）。こうした展開の背景に関する考察が新聞成立の大きなヒントがそこにあると思われるからである。新聞と同時期に普及したビラ（Flugblatt）、パンフレット（Flugschrift）などの印刷物はプロパガンダの色彩が強いが新聞との機能分担は、早くも広報活動と報道との相違を想起させる。さらには、印刷技術成立直前までのコミュニケーション手段たる書状・書簡の形態も調べざるを得ない。

新聞が成立・普及する過程での人々の反響なども可能な限り丁寧に迎えるべき対象であろう。メディア成功の鍵を握るのは常にオーディエンス（読者）だからである。この点だけは歴史を通じて変わらぬ問いとなるであろう。

参考文献

- Bentele, G. /Brosius, H.-B./Jarren, O. (2006) Lexikon Kommunikations- und Medienwissenschaft. VS Verlag, Wiesbaden.
- Böning, H. (2008) Zeitung und Aufklärung. In: Welke/Wilke (2008), S287-310.
- Burger, H. (1984) Sprache der Massenmedien. Walter de Gruyter, Berlin/New York.
- Eggers, H. (1985): Deutsche Sprachgeschichte. Bd 4, Neuhochdeutsch. Rowohlt, Reinbeck bei Hamburg.
- Fritz, G. (1996): Die Sprache der ersten deutschen Wochenzeitungen im 17. Jahrhundert. Niemeyer, Tübingen.
- Gebhardt, H. (1999): Forschungsgeschichte der Zeitung. In: Leonhard, J.-F./Ludwig, H.-W./Straßner, E. Medienwissenschaft. Ein Handbuch zur Entwicklung der Medien und Kommunikationsformen. Walter de Gruyter, Berlin/New York, 881-892.
- 梶谷素久 (1991)『新・ヨーロッパ新聞史』ブレーン出版、東京。
- Koopman, J. W. (2008) „Unverschämte und Ärgernis erregende Mächrichten verboten “. Politische Einmischung in niederländischen Zeitungen. In: Welke/Wilke (2008), 123-138.
- Koszyk, K. (1999): Allgemeine Geschichte der Zeitung. In: Leonhard, J.-F./Ludwig, H.-W./Straßner, E. Medienwissenschaft. Ein Handbuch zur Entwicklung der Medien und Kommunikationsformen. Walter de Gruyter, Berlin/New York, 896-913.
- Kunczik, M/Zipfel, A. (2005): Publizistik. Böhlau Verlag, Köln/Weimar/Wien.
- Lang, H. W. (2008): Die Neue Zeitung des 16. Und 17. Jahrhunderts. Vorläufer, Konkurrenz, Ergänzung? In: Welke, M./Wilke, J. (hrsg.): 400 Jahre Zeitung. Die Entwicklung der Tagespresse im internationalen Kontext. Edition lumiér, Bremen, S.117-122.
- Maissen, T. (2005): Die Geschichte der NZZ 1780-2005. Mit einem Anhang von Konrad Stamm. Verlag Neue Zürcher Zeitung, Zürich.
- シルト, J. (1999) : [図説] ドイツ語の歴史 (橘 好碩訳) 大修館書店、東京。
- 芝田正夫 (2000)『新聞の社会史』晃洋書房、東京。
- Straßner, E. (1997) Zeitung. Grundlagen der Medienkommunikation Bd. 2. Niemeyer, Tübingen.

- Straßner, E. (1999) Historische Entwicklungstendenzen der Zeitungsberichterstattung.
In: Leonhard, J.-F./Ludwig, H.-W./Straßner, E. Medienwissenschaft. Ein Handbuch zur Entwicklung der Medien und Kommunikationsformen. Walter de Gruyter, Berlin/New York, 913-923.
- 鈴木将史 (2001) フォス新聞—ドイツ語圏最初の教養新聞—。
平成11年度～平成12年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 研究成果報告書。
- Theobald, T. (2012). Presse und Sprache im 19. Jahrhundert. Eine Rekonstruktion des zeitgenössischen Diskurses. Akademie Verlag, Berlin.
- Welke, M./Wilke, J. (hrsg.)(2008): 400 Jahre Zeitung.edition lumière, Bremen.